

志水先生の／

なるほどコラム

大阪大学大学院 教授 志水宏吉

子どもとどうかかわるか「期待すること」の大切さ

子どもの将来のことを考えると不安になる保護者の方は少なくないでしょう。どの高校に進学したらよいか、どんな職業なら幸せになってくれるか、考えだすときりがありません。子どもには、本人が納得した上で、学校や職業選びをしてほしいものですが、保護者としてはどのようにかかわるのがよいのでしょうか。

教育の分野では、「ピグマリオン効果」と呼ばれるものがあります。もともと心理学の実験から生まれた言葉です。アメリカの学校で、あるクラスの子どもたちの何人かが「知的に優れている」、別の何人かが「優れていない」と診断されたという結果が、学級担任に伝えられました。学級での指導の参考にするためです。それから１年経ったのち、子どもたちがテストを受けると、「優れている」とされたすべての子どもの学力が向上しており、逆に「優れていない」とされた全員の学力が低下していたそうです。

実は、その診断の結果は全くのデタラメで、何の根拠もないものでした。にもかかわらず、教師が子どもたちに向けた「期待」の大きさ、あるいは小ささが、学力の変化に如実につながったのです。この結果から、「教育者がもつ大きな期待によって、学習者の学力は大幅に向上する」（もちろん、その逆もありえます）という現象が、「ピグマリオン効果」という言葉で呼ばれるようになりました（「ピグマリオン」とは、ギリシャ神話に由来する言葉）。

この話は、家庭での子育てにもかなりの程度で当てはまります。学年が進むにつれて、子どもたちは将来に対する夢や希望を持つようになるでしょう。もちろん壁にぶつかることもあります。勉強にしても運動にしても、「できないこと」が増えていくと、自分の夢をあきらめたい気持ちにもなるかもしれません。そこで、子どもへの「期待」を保護者が保ち続けることが大切になってきます。

「あきらめなければ、きっと夢は成就する」というメッセージを与え続けるべきです。もちろん、子どもに対して過度に期待しすぎることは、かえってプレッシャーになることもあります。勉強が苦手な子や、学校に行くことがおっくうな子に、「やればできる！」と強要することは、かえって追いつめてしまうことにもつながります。しかし、子どもの側からすると、親から「どうせできない」と切り捨てられることは、それと同じくらい、いやそれ以上に学ぶ意欲をくじくものとなります。ふだんの勉強や家庭生活、そして将来の夢や希望にかんして、優しい「まなざし」で期待してあげることが、子どもたちの“やる気”を力強くあと押ししてくれるはずです。

家庭学習チェックシート

ステップ3 「子どもの発達段階に応じたかかわり」



<チェックシートの使い方>

毎月できた項目にチェックを入れ、
合計を折れ線グラフにしてみましょう。

項目		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	本や新聞を読むようにすすめている												
2	自らも本を読み、子どもと感想をいいあっている												
3	子どもがいま学んでいる勉強を把握している												
4	計画的に勉強するよう促している												
5	英語や外国の文化に触れるよう意識している												
6	できるだけ博物館や科学館、図書館、美術館や劇場などに足を運んでいる												
7	子どもと「勉強や成績」「将来や進路」「友達のこと」について話をする												
8	子どもと「社会の出来事や話題のニュース」について話あっている												
9	学校の教育目標や、その達成に向けた方策を知っている												
10	学校やクラスの教育活動にかんする情報提供を役立てている												
できた項目 合計													

(できた項目数)



Memo